
すれ違い

日向 夕陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
すれ違い

【Nコード】
N5137K

【作者名】
日向 夕陽

【あらすじ】
“すれ違い”それは最近流行りの怪談で、人混みで死神とすれ違ひになれば死ぬという噂だ。
私は……………

*少し修正しました。

都会の人間は冷たい。すぐ近くにいても、互いの心が触れ合うことはない。道を聞いても誰も答えてはくれなかった。私の地元の町では、道を聞けば親切に教えてくれたりしたものだ。しかし、此処では目の前にいても全然違うところにいるのだと思わされてしまう。皆、自分の世界でいっぱいなんだろう……

私は少しの寂しさと切なさをおこのスクランブル交差点から感じた。

“すれ違い”それは最近この町で噂になっている怪談だ。人混みに紛れている死神とすれ違いになると魂を抜かれてしまうという噂だ。本当かどうかかわからないが、私にはこの話は本当だと思えない。噂は噂であり、真実と異なることが多々あるからだ。

その日私は、いつものようにスクランブル交差点の人混みの中を通り抜け、古本屋に向かった。途中、誰かに足を踏まれた。

「痛」

私は立ち止まった。しかし、周りは私のことが見えていないかの様に通り返りて行く。この分だと、私の足を踏んでいった犯人も通り過ぎて行ったのだろう。一言謝って行けばいいのに、と思っただ、もしかしたら向こうは踏んだことに気付いていないのかもしれない。この人混みなら仕方ない、そう思いながら私は痛む足を動かした。

目的の古本屋に着いた。さっき通って来たスクランブル交差点とは違い、人通りの少ない路地にある店で、そんなに大きくはない。かと言って、そんなに小さい店ではない。客が少ないので静かだが、普通の本屋だ。店に入ってすぐの所には喫茶店の様なオシャレな机と椅子が何個か置いてあり、そこで本を読むことができるようにな

っている。

私は店に入るといつものように適当な本を棚から取り出し、椅子に座った。この席は私の指定席の様なもので、ここに来るたびにこの席に座っている。そして本を開いて文字の世界に私は入っていた……。

三冊目の本を読み終え、時間を見ようと携帯電話を鞆から取り出そうとした時に私は、妙な物を見つけた。鞆の中から出して、手に取ってみる。

「白い封筒？」

見知らぬ物が自分の鞆の中に入っていたので私は少し困惑した。なぜこんな物が私の鞆に？考えてみても答えは出て来なかった。とりあえず私は白い封筒の中を確認するべく、開封することにした。

“これは呪いです。貴方はこの封筒を誰かに渡さないと死にます。助かりたいのならば、誰かに渡しなさい。期限は三日です。三日を過ぎると貴方の命はありません”

そう書かれた紙切れが一枚入っていた。

「何これ？」

私は紙を読み終えるとため息をついた。くだらないイタズラだなあと、そう思った。同時にいつの間に私の鞆に入っていたのか少し怖くなった。ストーカーだろうか？それにしてもまったく意味がわからない。少し悩んだあげく私は紙を封筒に戻し鞆の中に入れた。そして、本を買うべくレジに向かった。

家に帰り、靴を脱ぎベツトに倒れ込む。帰りにも人混みの中を歩いたせいか、私は疲れていた。東京に引っ越してきて半年が経つ

れど、私はまだ都会の人波には慣れることができずにいた。

買って来た本を袋から取り出し、自分の本棚に並べる。木でできた棚で、まだ半分しか本が並べられていない。私が此处に引っ越してきてから週末に必ず本を買うことにしていた。それでやっと半分埋まったのだ。少し本棚を見つめた後、鞆の中からあの封筒を取り出す。もう一度読んでみるが、くだらないイタズラだと私思った。

「チエーンメールみたい」

チエーンメールみたいにこの紙切れもい로운な人から回って来たのかも知れない。しかし、誰が私に回したんだろうか？ 私はまだこつちには友達はあまりいない。大学での友人はいるが、それほど仲がいい訳でもなく大学だけでの付き合いだ。この封筒は昨日は確かなかったハズだ。一体誰がなんの為に私の鞆に入れたのだろうか。少し考えた後、私は封筒を引き出しに入れ、夕飯を作ることにした。

それから私は白い封筒のことなど気にせず普通に暮らした。友人に話しをしてみたが、最近流行りの“すれ違い”を元にした遊びだったらしい。

人混みの中ですれ違う時に、相手の鞆の中に封筒を入れるのだと言う。それを聞き、私は少し安心した。別に信じていた訳ではなかったが、こういう話を聞いたら、やはり安心していまい。しかし、私は友人の次の言葉に少しの不安を抱いた。

「そういえばさ、中には本物もあるんだって」

「本物？ どういうこと？」

「えっとね、私もよくわからないんだけど、イタズラに混じって本物もでるんだって。だから、封筒貰ったなら誰かの鞆の中に入れていた方がいいよ」

なんて無責任な、と思いながら私の心は揺れていた。聞かなければよかった、少し怖くなってしまった。

家に帰るとすぐに私は引き出しを開けた。そこで私は背筋が凍っ

た。封筒の色が白から灰色に変わっていたのだ。これは本物だ、私は瞬間的に思った。拾ってから今日で三日目なので今日中にこの封筒を誰かの鞆にいれなければならない。私は焦った、それができないれば私は噂の“すれ違い”に魂を抜かれてしまうからだ。封筒の中の紙切れを取り出して見てみると。それにしても、噂とはかなり違う。やはり噂は所詮は噂のようだ。

“これは呪いです。

貴方はこの封筒を誰かに渡さないといけません。
期限は今日中です。

貴方は自分を守る為に誰かを犠牲にしなければなりません。
貴方はどうしますか？”

驚くことに文章が変わっているのだ。

「なんでなんでなんでえ！！」

私は軽いパニックに陥り、机をバンバン叩いた。 「早く誰かに……」

封筒を鞆に入れ、急いでスクランブル交差点へ走った。

スクランブル交差点はいつもの様に人で溢れていた。急いでその人混みに入る。

「早く誰かに」

自分に言い聞かせるように呟き、目標を定める。見覚えのある鞆を見つけてすぐさま駆け寄る。

（自分の為に誰かを犠牲にするの？）

（仕方ないよ、だって死にたくないんだもん。）

（死にたくなかったら、誰かを犠牲にしているの？）

（どうせ誰かが死んでも私には関係ないよ。）

（本当に？）

（本当だよ。この街の人達は他人との関わりを持たないの。みんな自分の世界で生きてる。周りのことなんて気にしない。自分がよければそれでいいんだ。だから私も……いいよね？）

そして――

封筒をその鞆の中に入れた。相手の女性はこちらには気づいていない。後は立ち去るだけ、そう思った時、人とぶつかってしまい、女性の足を踏んでしまった。

「痛」

女性が何か喋っているが私の頭にはそれは入らない。急いでここから立ち去らないと、そういう思いでいっぱいだった。

やっとの思いで、人混みから出ることができ、一息ついているとそれが目に入った。

鞆から黒い封筒がはみ出していた。

「なんでどうして」

私はパニックに陥った。確かに封筒を入れたのに、どうして私の鞆に入っているのだろう。私はその場にしゃがみ込んだ。誰も私に興味がないかのように通り過ぎていく。

「どうして封筒が戻ってきたの」

「それはね」

自分の呟きに誰が答えた。

「誰かを犠牲にしようとするからよ」

その声を最後に私の意識は途切れた……………

（誰かを犠牲にしようとするから？）

——私はなんで？

（そうだよ、誰かを犠牲にしたよ。なのになんで助からなかったの？）

（思い出してみて）

——誰も私を……………

（思い出す？何を？）

（貴女は誰から受け取って誰に渡したの？）

（誰から？わからないよ。）

（思い出して。）

（誰に渡した？）

——そうだあの鞆、見覚えあると思ったら私の鞆だ。
私だったんだ……………

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5137k/>

すれ違い

2011年10月6日17時15分発行